

ポストコロナの授業評価に関する考察 ～オンライン授業と対面授業の授業評価の比較から～

A Study of Class Evaluations by Students on Post COVID-19
～ A Comparative Analysis between Online Classes and Face-to-Face Classes ～

小西英行* 田中友理*
Hideyuki KONISHI Yuri TANAKA

キーワード：授業評価、オンライン授業、対面授業、コロナ禍

Keywords：Class Evaluations, Online Classes, Face-to-Face Classes, COVID-19

1. はじめに

我が国において、「学生による授業評価アンケート（以下、断りのない限り授業評価と表現する）」を、同一の教育機関において複数の教員が組織的に実施したのは1984年のことであり、東海大学においてであった（安岡ほか1999）。そして全学全科目において授業評価を実施したのは、1990年の多摩大学においてであり、多摩大学では、授業評価を『voice』と呼び、学生からのフィードバック情報を得て、授業方法の改善を図る目的で実施している。その後現在では、ほぼ100%の大学で授業評価が実施されているが、さらに多摩大学では、授業評価の総合点の高い教員を、受講生の人数によっていくつかのグループに分けて表彰する、褒章制度を設けている。この褒章制度は、授業評価の結果を授業改善に役立てるべく、優れた授業改善の結果、授業評価の総合点が高い教員を表彰する制度であるが、結果として表彰される教員は、ごく少数の教員が繰り返して対象となる傾向があり、表彰を受ける教員に共通する要因がありそうである。例えば、授業評価に影響を与える要因としては、授業の内容もさることながら、一方的ではなく双方向的であることや、熱意やユーモアなどの教員の人間性の要因が大きいという指摘がある（加藤2014）。

こうした中、2020年度に始まる新型コロナ禍による授業のオンライン実施によって、授業評価自体もオンラインで実施されることとなり、その回答結果の分析においてもいくつかの研究が発表されている。例えば橋本（2022）は、オンライン授業と対面授業の両方を経験した大学1年生が、それぞれの形態の授業をどのように評価しているかについて、授業評価の自由記述欄に書かれた内容をKJ法で分析している。その結果、オンライン授業に対するメリットとして、「通学時間が不要である」ことや、「授業の内容（動画）や資料を繰り返して見返せる」ということが上位に挙げられ、デメリットとして、「通信環境の問題」や、「教員に質問出来な

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

い、「友人と相談できない」などのコミュニケーションに関する問題が上位に挙げられている。一方、対面授業に対するメリットとして、「授業に集中できる」や、「教員に質問出来る」、「友人に相談できる」など、オンライン授業のデメリットの裏返しの内容が多かった。特筆すべきは、対面授業のデメリットとしては「特になし」の回答が最も多く、オンライン授業のメリットの裏返しだが、対面授業のデメリットには至っていないことを示している。

2. 問題の所在

こうした背景のもと、本研究では、コロナ禍の2020年度より実施されたオンライン授業と、それ以前の対面授業、そしてオンライン授業を経験した後の（ポストコロナの）対面授業のそれぞれにおいて、授業評価がどのように変化するか比較分析を行う。というのは、コロナ禍以前の対面授業において、授業評価で表彰された教員の多くが、コロナ禍のオンライン授業においても表彰を受け、さらにその後の対面授業に戻った際にも当然のように表彰を受けている。さらに驚くべきことに、授業評価の総合点が、コロナ以前の対面授業よりもコロナ禍のオンライン授業で向上し、さらにその後の対面授業に戻った際の総合点がさらに向上している教員が複数存在することから、コロナ禍でのオンライン授業への取り組みの可否が、授業評価に何らかの影響を与えたのではないかと仮説に至ったのである。

いわゆるオンライン授業には、「資料を読み、ネットで質問や課題提出などを行う方法」である「講義資料型」、「LMS（Learning Management System）を活用し、事前に録画された授業動画を見る方法」である「オンデマンド型」、「Google MeetやZoom等で、授業の生中継を見る方法」である「リアルタイム型」の3形態があるが、これらのタイプ別における授業評価の各項目の値は、リアルタイムがやや良いものの、その差は小さいという報告がある（松河ほか2022）。また、オンライン授業のリアルタイム型と対面授業との比較においては、オンライン授業と対面授業の授業満足度の値は、対面授業がリアルタイム・オンデマンドいずれのオンライン授業よりも有意に高いという報告もある（江口ほか2022）。しかしながら、オンライン授業・対面授業といった授業形態と授業評価の関係の分析の多くは、同じ学期や年度内での比較であることが多く、コロナ以前の対面授業と、コロナ禍のオンライン授業、そしてオンライン授業を経験した後の対面授業において授業評価を比較した研究は、まだほとんどない。

ところで、どの形態のオンライン授業を実施する場合にも、必要不可欠なのがLMSである。オンデマンド用の動画や資料を配信する際にはもちろん、Zoom等を利用したリアルタイム双方向オンライン授業の実施においても、課題提出や、オンライン授業へのリンクなどの案内のためにLMSを利用することになる。河内ほか（2021）は、LMSを利用した授業改善の取り組みの重要性について指摘しており、中村（2021）は、学習意欲の高い学生にとって、オンデマンド型のオンライン授業が対面授業以上に効果的に機能する可能性について指摘している。さらに、橋本ほか（2021）は、コロナ禍におけるオンライン授業と、その後再開された対面授業やオンラインと対面を併用した授業において、LMSを活用した授業改善が、学修成果に与える影響について検討している。2020年度はオンデマンド教材として動画を配信することに注力せざるを得なかったが、2021年度は反転授業としてオンデマンド配信動画を活用し、対面授業や双方向オンライン授業において活用することにより、授業満足度の向上につながっていると考えられる。

そして、グループワーク等のアクティブラーニングを活用した授業マネジメントにおいてはリアルタイム・オンライン授業よりも対面授業の方が勝り、授業資料の配布（配信）や課題のフィードバックなどの授業マネジメントにおいては、オンライン（オンデマンド）が勝っており、LMS等のオンライン（オンデマンド）を活用した授業マネジメントを併用することが、オンライン授業を経験した後の（ポストコロナの）対面授業においては重要となる。そしてあらゆるオンライン授業の形態や対面授業においても、教員からのフィードバックがあるほど授業評価の全体満足度が高い（西本 2021b）。コロナ禍が始まった当初の2020年春学期においては、対面授業が全面的に実施不可能となり、オンライン授業を行うために必要不可欠のツールとしてLMSの活用がすすんだため、これまでLMSを活用していなかった全ての授業において、LMSの活用が始まったともいえる。

3. 授業形態別の授業評価データの分析

上記の問題意識に基づき、以下の仮説をたて、実際の授業評価のデータを用いて検討する。

仮説①：オンライン前の対面授業で評価が高かった教員は、オンラインでも評価が高い

仮説②：オンライン授業で努力した科目（＝授業評価が高かった科目）は、その経験やスキルを活かすことができるため、その後の対面授業でより評価が高くなる

分析には、2つの大学（首都圏私立理系 S 大学および首都圏私立文系 T 大学）の授業評価データを用いた。2019年から2021年度の春学期に開講された科目のうち、3年間とも担当教員が同一であったものを分析対象とした。科目担当者は常勤・非常勤講師のどちらも含まれていた。ただし、各年度の授業評価の回答者数が10人以下であり、かつ回収率が50%未満である科目は分析から除外した。最終的に分析対象となったのは111科目（S大学68科目、T大学43科目）であった。なお、どちらの大学も、2019年度および2021年度は対面授業を、2020年度はオンラインで授業をおこなっていた。両大学においてオンライン授業は全てリアルタイム双方向で実施しており、動画あるいは資料配信型のオンデマンド授業は含まれていない。

授業評価の設問は両大学において異なっていたが、比較のため、類似した内容を含む設問のみを分析対象とした。設問の内容を Table 1 に示す。設問の内容から「資料の効果」「意欲向上」「理解度の確認」「双方向性・FB」「シラバス」「受講満足度」の6項目に分類し、その6項目の平均得点を「総合評価」とした。なお、回答には S 大学は3件法を用いており（はい=10、どちらでもない=5、いいえ=0）、T 大学は5件法（1=全くそう思わない～5非常にそう思う）を用いていた。

まず、各授業形態間の授業評価の関係を調べるため、年度間の個別の授業評価の相関係数を算出した（Table2）。その結果、S 大学、T 大学の両方で、各年度間の授業評価スコアに相関がみられた。すなわち、もともとの対面授業で高く評価されていた科目は、オンライン授業となっても、その後に対面授業に戻っても、評価が高いことが示された。そのため、「仮説①：オンライン前の対面授業で評価が高かった教員は、オンラインでも評価が高い」は支持された。

Table 1.
分析で用いた授業評価項目とS大学およびT大学の設問

| 項目 | S大学 | T大学 |
|---------|--|---------------------------------------|
| 資料の効果 | 資料配布、説明動画、教科書などは効果的に使われて、授業理解に役立っていますか | 教材と資料が効果的に使われている |
| 意欲向上 | 好奇心を刺激したり、意義や必要性を感じさせたりして、学ぶ意欲を高める内容になっていますか | 授業内容が興味深く触発されることが多い |
| 理解度の確認 | 教員は学生の反応や理解度を確認しつつ授業を進めていますか | 学生（院生）の理解水準を踏まえた説明をする |
| 双方向性・FB | 提出した課題やレポート、質問などに対して、適切な説明や指導がおこなわれていますか | 授業を双方向で行っている |
| シラバス | 授業の内容は授業ガイダンス等で事前に説明され理解したものと合っていますか | シラバスのとおりに授業が行われている |
| 受講満足度 | この授業を受けてよかったですと感じていますか | 「授業は有益（効果的）でしたか」「授業に真剣に取り組んだ」の2項目の平均値 |
| 総合評価 | 上記6項目の平均値 | 上記6項目の平均値 |

注) S大学は「はい=10、どちらでもない=5、いいえ=0」、T大学は「1. 全くそう思わない ～ 5. 非常にそう思う」で回答を求めた。

Table 2.
S大学およびT大学における年度間の授業評価スコアの相関係数

| | 資料の効果 | 意欲向上 | 理解度の確認 | 双方向性・FB | シラバス | 受講満足度 | 総合評価 |
|--------------------|-------|------|--------|---------|------|-------|------|
| S大学(n = 68) | | | | | | | |
| 2019年度-2020年度 | .36 | .47 | .49 | .31 | .17 | .44 | .47 |
| 2020年度-2021年度 | .39 | .38 | .49 | .33 | -.01 | .33 | .51 |
| 2019年度-2021年度 | .50 | .55 | .61 | .60 | .59 | .57 | .63 |
| T大学(n = 43) | | | | | | | |
| 2019年度-2020年度 | .67 | .60 | .51 | .67 | .57 | .61 | .67 |
| 2020年度-2021年度 | .67 | .63 | .53 | .64 | .55 | .64 | .67 |
| 2019年度-2021年度 | .68 | .71 | .76 | .78 | .71 | .68 | .75 |

次に、元々の授業評価の高さに関係なく、特にオンライン授業で評価が上がった程度と、オンライン後の対面授業の評価の関連を調べるために、2019年度の授業評価スコアを統制した、2020年度-2021年度の偏相関係数を算出した（Table 3）。その結果、両大学において、少なくとも「総合評価」では.30を超える偏相関係数が得られた。よって、仮説②「オンライン授業で努力した科目は、その後の対面授業でより評価が高くなる」は支持された。

Table 3.
S大学およびT大学における2020年度-2021年度間の授業評価スコアの偏相関係数

| | 資料の効果 | 意欲向上 | 理解度の確認 | 双方向性・FB | シラバス | 受講満足度 | 総合評価 |
|-------------|-------|------|--------|---------|------|-------|------|
| S大学(n = 68) | .26 | .17 | .28 | .19 | -.14 | .10 | .31 |
| T大学(n = 43) | .38 | .37 | .25 | .25 | .25 | .39 | .33 |

注) 統制変数：2019年度の授業評価スコア

さらに、対面授業とオンライン授業に対する評価を比較するため、両大学について、2019年度～2021年度の授業評価スコアの全科目平均をグラフ化した（Fig. 1, 2）。全体的な傾向として、S大学では2019年の対面授業よりも2020年のオンライン授業の方が評価が高く、さらにそれよりも2021年度の対面授業で授業評価が高いことが示された。一方、T大学においては、オンライン授業であった2020年度の評価が低い傾向がみられた。オンライン授業でも対面授業

業と同じ質を保つことは難しい可能性がある。また、オンライン後の対面授業では、コロナ前の対面授業と同程度に評価されていた。

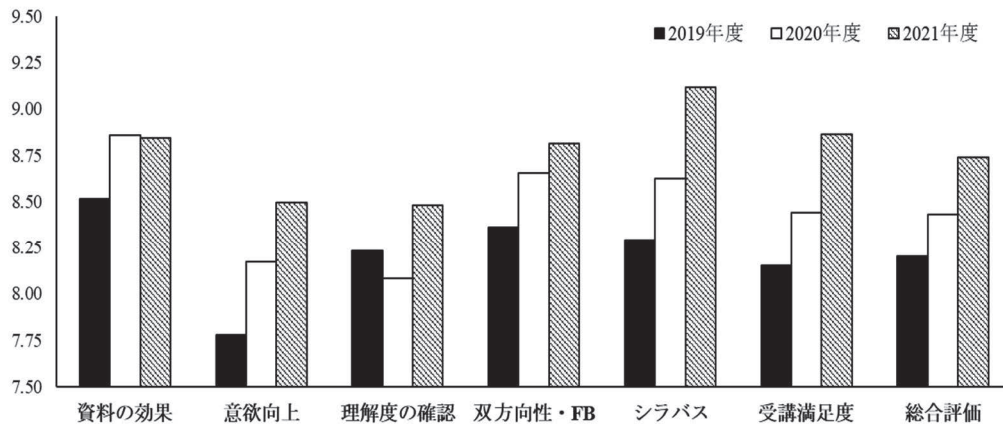


Figure 1. S大学における授業評価スコアの2019年度～2021年度の推移(n = 68)。

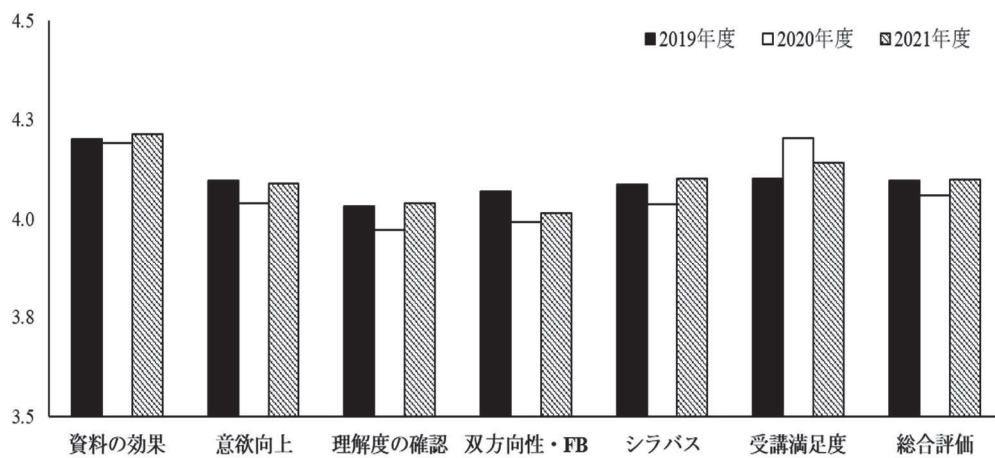


Figure 2. T大学における授業評価スコアの2019年度～2021年度の推移(n = 43)。

なお、S大学、T大学の両方で、2019年度（対面）と2020年度（オンライン）及び、2020年度（オンライン）と2021年度（対面）の相関よりも、2019年度（対面）と2021年度（対面）の相関係数の値が随分と大きい。これは、対面授業で高く評価されていた2019年度の授業の多くが、2020年度のオンライン授業を経て、2021年度に完全に対面授業に戻ったことで、過去の高い評価をしっかりと取り戻したことを意味する。また、年度間の授業評価スコアの相関係数のうち、双方向性とシラバスの項目において、2019年度と2021年度の相関係数の値が、2019年度と2020年度及び、2020年度と2021年度の相関よりも随分と大きい。これは、両大

学に共通するオンライン授業の形式である、リアルタイム双方向授業という形式により、対面授業とオンライン授業（及びオンライン授業と対面授業）との間に、双方向性という観点での授業評価の相関は一定程度あったものの、やはり双方向性という点で、対面で顔を突き合わせて行う授業に勝るものはないことを示している。

あと、S大学とT大学との間で、各項目の相関係数の傾向はほぼ同じであるが、双方向性という項目においては、対面授業とオンライン授業（及びオンライン授業と対面授業）の相関係数の値が、S大学のほうがT大学よりもかなり小さい。T大学では、リアルタイム双方向のオンライン授業において、原則として受講学生全員にカメラオン¹（いわゆる顔出し）をお願いし、常勤・非常勤の授業担当教員にこの徹底を依頼した。一方で、S大学では、カメラオンの原則は実施していなかった。このあたりが、T大学とS大学との結果の差につながったと考えられる。

4. まとめ

以上みてきたように、コロナ禍前の対面授業で授業評価の高い教員の多くは、コロナ禍のオンライン授業でも、そしてオンライン後の対面授業でも高い評価を得ている。そしてあらゆるオンライン授業の形態や対面授業においても、教員からのフィードバックがあるほど授業評価の全体満足度が高い（西本 2021b）ことから、こうした授業評価の高い教員の多くは、オンライン授業下で適切にLMS等を活用したフィードバックを行ったと推測される。特に、コロナ禍以前の対面授業において授業評価の高かった教員の多くは、おそらくLMS等を活用したフィードバックはあまり利用していなかったが、コロナ禍でのオンライン授業ではLMSを使うことが必須となり、これを活用した双方向のフィードバックを行うことで、オンライン授業においても授業評価が高かったことが推察される。そして、オンライン授業で利用したLMSによるフィードバックを、対面授業に戻ってもうまく活用することで、オンライン経験前の対面授業での評価よりも、オンライン経験後の対面授業において、さらに高い評価を得た教員がいたのではないかと考えられる。これらの検証については、今後の課題としたい。

<参考文献>

- ・浅賀圭祐, 小原一仁, 高平小百合 (2021): “コロナ禍におけるオンライン授業の方法と学生の孤立感: 学部における授業評価アンケートの分析から”, 論叢 玉川大学教育学部紀要 (21), 玉川大学教育学部編, PI-11
- ・宇塚万里子, 稲森岳央 (2022): “コロナ禍における新一年生のオンライン授業における課題と改善点〜

¹ オンライン授業でのカメラオン（いわゆる顔出し）については、インターネット上でのトラフィック量の増大につながるので、一般にこれを義務化することはあまりない。しかしながら、カメラをオフにすれば、オンラインの向こう側でまともに授業を聞かない学生の存在が想定され、T大学では、リアルタイム双方向のオンライン授業を、従来の対面授業をいかに忠実に置き換えるかという観点で検討し、いくなれば「オンラインで対面授業を実施」したことになる。2020年度春学期には何度も全学FD勉強会を実施し、「オンラインで対面授業実施」を学内で徹底した。また、T大学のインターネット回線は、小規模大学であるにもかかわらず、大規模な国立大学並みのスペックを有しており、2020年夏にインターネット回線をさらに10倍以上にする工事を、コロナ禍以前に計画していて、実際にこれを実施したことも、原則カメラオンの実施を後押しする結果となったといえる。

- 全学ガイダンス科目「岡山大学入門講座」実践報告”, 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第6巻 P206-217
- ・江口晶子, 廣瀬允美, 影山孝子, 小川典子, 根岸隆介, 大熊泰之 (2022): “COVID-19 パンデミック下におけるオンライン授業の評価”, 順天堂保健看護研究 第10巻) P43-49
 - ・加藤幸次 (2014): 『大学授業のパラダイム転換 - ICT時代の大学教育を創る -』: 黎明書房
 - ・河内彩香, 村田晶子, 長谷川由香, 竹山直子, 池田幸弘 (2021a): “【実践報告】 教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか: Zoom と Google Classroom を併用した日本語教育”, 法政大学グローバル教育センター日本語教育プログラム 多文化社会と言語教育第1巻 P30-45, 2021-03-31
 - ・河内彩香, 村田晶子, 長谷川由香, 竹山直子, 池田幸弘 (2021b) “【実践報告】 教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか Zoom と Google Classroom を併用した日本語教育”, 法政大学グローバル教育センター日本語教育プログラム 多文化社会と言語教育 第1巻 P30-45, 2021-03-31
 - ・小西英行 (2022): “ポストコロナの授業評価に関する考察～オンライン授業と対面授業の授業評価の比較から～”, 初年次教育学会第15回多摩大学大会要旨集
 - ・白石 龍生, 白石 大悟 (2022): “新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大下における授業改善”, 日本福祉大学全学教育センター紀要 10号
 - ・中村哲之 (2021a): “オンライン授業 (オンデマンド型) における教育効果: 教育心理学的観点からの実践的検討”, 東洋学園大学教職課程年報第3号 2021-03-20 P1-P14
 - ・中村哲之 (2021b): “オンライン授業 (オンデマンド型) における教育効果—教育心理学的観点からの実践的検討—”, 東洋学園大学教職課程年報第3号 P1-14, 2021-03-20
 - ・西本裕輝 (2021a): “授業評価の自由記述から見る遠隔授業の課題とその対応”, 琉球大学教育センター報 23号, 2021-05-26
 - ・西本裕輝 (2021b): “令和2年度前学期共通教育等科目における「学生による授業評価」の分析結果”, 琉球大学グローバル教育支援機構 琉球大学教育センター報 23号 P 18-45, 2021-05-26
 - ・橋本和幸 (2022): “コロナ禍にオンライン授業と対面授業の両方を受講した学生による授業評価”, 了徳寺大学研究紀要 (16) P137-150
 - ・橋本清勇, 井山慶信 (2021): “ラーニング・マネージメント・システムを活用したオンライン授業の改善～情報系演習授業における反転授業と学修実態評価機能の効果的利用～”, 広島国際大学 教職教室教育論叢 13号 P75-85
 - ・樋口勝一 (2021): “学生の出席状況と授業評価の関係～情報処理演習Ⅱの結果から～”, 甲子園短期大学紀要 39号 P7-13. 2021
 - ・巻 康弘, 大友 芳恵, 福井 純子, 遠藤 紀美恵, 山田 律子 (2022): “「遠隔授業」導入年度の福祉学生による授業評価と課題～隠れたカリキュラムに着目して～”, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 18巻1号
 - ・松河秀哉, 申本剛, 杉本和弘 (2022): “東北大学の全学教育における授業形態の影響 - 授業評価アンケートの結果から -”, 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 第8巻 P3-12, 2022-03
 - ・安岡高志, 滝本喬, 三田誠広, 香取草之助, 生駒俊明 (1999): 『授業を変えれば大学は変わる』, プレジデント社
 - ・安岡高志 (2007): “学生による授業評価の進展を探る”, 京都大学高等教育研究 13 P73-88, 京都大学高等教育研究開発推進センター

